

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿 4月12日（金）放送分

テーマ「奄美先人の知恵」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今年度は，毎月第2金曜日に，奄美の文化・暮らしにおける先人の工夫などを紹介する「奄美先人の知恵」シリーズをお届けします。

「家の造り^{よう}は夏を^{むね}旨とすべし。冬は如何^{いか}なる所にも住まる。あつき頃，わろき^{すまい}住居はた^え入がたき事なり。」

これは，今から約680年前の鎌倉時代に書かれた，吉田兼好の「徒然草」第五十五段の一節です。徒然草は，ものの見方や考え方を評論的，説話的，回想的に，心に浮かぶまま，ユーモアを交えながら書きつづった随筆です。

先程の一節は，扇風機やエアコンのなかった時代に，冬の寒さは衣服次第でどうにかなるのだけれども，夏の暑さばかりはどうにも耐えられないから，「住まいは夏を考慮して作った方がいい」という考えです。

奄美大島の住居についても，その気候風土に適した知恵と工夫がありました。恵原義盛の著書「奄美生活誌」には，住居について次のように説明されています。

昔の家は茅^{かやぶ}葺きで，その茅の内容は地方により異なっていました。奄美は雨が多いため藁^{わら}を用いることはほとんどありません。最も多いのは芒^{すすき}で，次はマカヤと呼ばれる茅です。大和村東部と名瀬の西部は，笹で葺くのが本式となります。また笠利地方の東海岸線では芒や茅が少ないこともあって，蘇鉄の葉を用いた家が多くありました。

また，木材については，雨のかからない中の方はイジュ（ヒメツバキ）を，外の柱はヒトツバ（いぬまき）を用いるのが最高であると書かれています。イジュは雨にかかると腐食しますが，ぬれないかぎり永久的であり，しかも硬く，強くて，数百年経っても少しも変わらない家もあるのです。また，ヒトツバは雨にさらされても青錆^{さび}がつく程度で数百年たっても腐さらないと記述されています。

また，名越^{なごしまもる}護さんが，名越^{なごやさげんた}左源太の「南島^{なんとうざつわ}雑話」をわかりやすく解説した「南島雑話の世界 名越左源太の見た幕末の奄美」では，住居について次のように紹介されています。

「家は、ほとんどがカヤで葺いていた。長さ約〇・六メートルに切った『青ガヤ』のまま葺いたが、八年ほどは持つらしい。(中略)カヤ葺きだと一つ屋根には特別に広い部屋は造れない。それで、五つも六つも家を同じところに造ってつないでいく。家の中は、客座を^{おもて}表^{ないしょう}と言い、そのつぎに内証(寝る所)、台所、物置などがある。」

カヤ葺きも本土とは違って、根の方を内にしてふき、先の方をはさみそろえることはしなかったようです。見かけはよくないけれども、数年間腐らないように、このような工夫をしていました。

そして、炊事する場所と居住する場所を別に建てる形式は、南太平洋に浮かぶポリネシアやミクロネシアの島々にみられる建築の様式です。奄美大島で見られる高床式の倉庫である「高倉」も、ミクロネシアに分布が見られます。

高倉については、「南島雑話の世界 名越左源太の見た幕末の奄美」で次のように記述されています。

「『高倉』のある風景は、いまま奄美独特の美しい景観だ。高倉は、南洋の高温多湿な気候から穀物を守る高床式の穀物庫で、堅いイジュの木などで造った四本の丸柱は、約三十センチの高さのところに頑丈な貫^{ぬき}(横木)が渡してあり、これで総体を持たせて台風などの大風に少々揺られても倒れることはない。火災などのときは、この貫を抜き取って綱で引き倒した。

床は、地面から二～二・四メートルのところにあり、中は夏でも涼しく虫付きも少ない。柱は丸くすべすべしているので普通ネズミは上れず、よっぽど粗末に作らなければネズミ害はほとんどない。」

世界地図を広げると、奄美大島は南太平洋の島々とつながる位置にあります。住居から南太平洋の文化とのつながりが推測できるのではないのでしょうか。また、奄美大島は約100万年前に大陸から離れて島になり、大陸とのつながりがわかる生物が、現在も見られます。

これまで何気なく見ていた身近なことについて、日本・世界へと視野を広げてみると、奄美大島の新たな発見ができるかもしれません。その時に、奄美図書館の図書も参考にいただければ幸いです。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。